

学校紹介

School

工業課程の軌跡

— 地域の皆様に支えられて —

学校法人 北海道立正学園 旭川実業高等学校長 宮下 靖広

1. はじめに

北海道立正学園旭川実業高等学校は、昭和35年に、自動車科と商業科の2科で開校し、翌36年に電気科と建設科、37年に機械科、39年に普通科を設置し、総合高校となった。今年が昭和100年に当たる年なので、令和7年は開校65周年の節目の年である。

昭和56年に大韓民国の慶福女子商業高等学校と姉妹校提携をし、その交流を44年継続するなど、早期から国際的な視野を広げる教育を推進している。

工業科の最盛期には4科で1500名以上が在籍する時代もあったが、急激な少子化の進行、大学進学志望者増による普通科志向の高まり、通信制課程への進学者の増により、現在は2科（自動車科・機械システム科）に再編・統合し、各学年30名定員を割るのが現状である。

2. 建学の精神

創立者の思いを具現化するために、以下に建学の精神を定めている。

- (1) 人間の尊厳を理解し、**真理を追究**し、正義を貫く。
- (2) 社会に対する使命を理解し、権利の飽くなき主張と、義務の極端なる回避は、何れも社会生活を不安定ならしめることを認識し、**遵法**を社会生活の基盤として、その平和と繁栄に資す。

(3) 技術を鍛錬し、知識を高め、独善にかたよらず、常に反省して、**中正**に処する。

(4) 叡智をつくして天地の理法に調和し、**寛容**の美德を以て隣人を愛し、郷土を愛し、国家を愛し、民族を愛して、人類の福祉向上に貢献する。

3. 令和7年度 学園経営の方針

『100年続く学園を目指す。』

4. 教育目標（スクール・ミッション）

『建学の精神』を体現する。

5. 教育方針

(1) スクール・ポリシー

生徒一人一人の個性・能力の伸長をはかり、自主独立の精神と国際的視野を養い、国家社会の興隆発展とその福祉増進に寄与できる人材を育成する。

(2) グラデュエーション・ポリシー

命の尊さを知り、自然環境と友情を重んじ思いやりの心を育てる。

健康と品格のある行動を心がけ、心技体の調和を図り、創造力豊かな心を育てる。

自ら学び、多様な価値観を尊重し、自主的に正しい行動ができる生徒を育てる。

ボランティア精神に溢れ、地域から信頼される生徒を育てる。

文武両道を常とし、学力向上と課外活動の奨

励を目指し、資格取得に果敢に挑戦する心構えを育てる。

国際的視野を養い、コミュニケーション能力を育てる。

(3) カリキュラム・ポリシー（科方針）

（自動車科） 週 30 時間、6 時間授業を実施し、専門知識や技術の習得に挑戦し、地域に信頼される教育を目指す。また、自動車のプロフェッショナルと技術革新に対応した人材育成の教育課程を編成する。

（機械システム科） 週 30 時間、6 時間授業を実施し、専門知識や技術の習得に挑戦し、地域に信頼される教育を目指す。「人のために役立つものづくり」と技術革新に対応した人材育成の教育課程を編成する。

(4) アドミッション・ポリシー

共生の理念がある生徒

心技体の調和が取れる生徒

自立心と自律心のある生徒

利他心のある生徒

向上心のある生徒

国際理解に興味関心が高い生徒

6. 本校を取り巻く現況

旭川市内に私立高校は5校あり、それぞれに特色を持った教育を推進している。本校は前述した建学の精神を体現するために、進学実績の向上、資格取得の励行、部活動を含む課外活動の活発等、教職員が一丸となって教育の推進をしている。又、明るく元気で活発な生徒が多数進学してくる雰囲気があり、ありがたいことに旭川市内のみならず、全道各地から本校に進学してくる高校である。特に、部活動に於いては、全国制覇を成し遂げた女子バレー部を筆頭に男子サッカー部や野球部も全国に名を馳せており、複数のオリンピック選手やプロスポーツ界で活躍する人材を輩出している。

一方、機械科出身の安村氏が「とにかく明る

い安村」として、ブレークを果たしたように、誰からも好かれる人柄の育成には定評があり、各分野で活躍している。

又、地域に根ざした活動として、所属する町内会のボランティア活動にも積極的に参加し、地域の見守り隊として活動もしている。

本校を卒業した生徒が親となり、自分の子を進学させてくれる傾向が強いのも特徴である。特に自動車科においては家業を継がせるために、親子3代に渡り学んでくれる方もおり、本当に頭の下がる思いである。

しかし、本校の位置する旭川市北部は少子化が一段と進行している地域で、小中学生の数が年々減少している。又、春光台という高台に立地しているため交通の便は良いとは言えず、目的が希薄な中学生にとっては選択しづらいという声を耳にする。目的を持って高校選択できる生徒ばかりであれば問題ないが、漠然とした進路希望者にとって特に工業課程は選択しづらいという側面を考慮した募集活動や教育課程の編成を計画しているが、特に機械システム科の募集が上手くいっていないのが現状である。

7. 現在の工業課程の取組

・自動車科の軌跡・取組

前述したが、昭和35年の設立当初から設置され商業科と共に本校では一番長く存続している科である。国土交通大臣指定第一種自動車整備士養成施設に指定されており、実技試験免除で三級自動車整備士を受験することができ、多くの整備士を送り出している。

近年、全国的に自動車整備士不足が深刻化しており、旭川市内においても例外ではない。自動車への興味が薄れてきている現状もあり、本校自動車科への入学生も減少傾向にある。そこで魅力ある色々な取組や、情報の発信を行い入学者の増、及び地域への貢献を目指している。

まず地域の小学生や中学生を対象とした自動

車体験型イベントの開催や地元の自動車販売店のイベントへの参加などを行い、小さい頃から自動車に興味を持たせ整備士への理解を深めることから始めた。更により楽しく自動車について勉強することを目的とし「モータースポーツサークル」を立ち上げ、その取組の一つとしてeモータースポーツにも取り組み北海道でチャンピオンを獲得することができた。また親子を対象としたミニ四駆教室や放課後のジュニアサークル（小学生対象）などを開催し、自動車の楽しさを伝える活動を積極的に行っている。

その他にも1967年（約60年前）に販売されていたトヨペット・コロナのレストアをエンジニアクラブのメンバーで行っている。時間はかかっているが、エンジンやボデーそして足回りといったすべてを手掛け、ボロボロであったコロナが徐々に復元されてきている。

情報の発信として、これらの様子を動画に残しYouTubeにチャンネルを開設して配信している。登録者数も徐々に増えており、自動車科でどのようなことを学び、どのような雰囲気や学習生活しているのかを知るコンテンツとしてとてもよい宣伝効果がある。もっともっと自動車そして本校に興味を持ってもらえるような取組を日々考察し実践していきたいと思っている。

・機械システム科の軌跡・取組

機械科としてスタートし、時代の流れに即して電気科と統合し「総合技術科」に改組、その後「機械システム科」と名称変更し、現在に至る。資格取得についても危険物取扱者や2級ボイラー技士、そしてガス溶接技能講習等の機械関係の資格に加え、第二種電気工事士などのその他の分野の資格にも積極的に取り組み進路の幅を広げている。卒業生が各方面で活躍し地元、地域の企業に貢献している。

近年は「人のために役立つ」をテーマに、地域・社会に根差した取組を実践するため「ものづくり」を通じて、「考える力」「創造する力」

「地域・社会に貢献する力」を育てる教育に力を注いでいる。

その取組の一つが、本校の生徒玄関横にある柵の補修である。下記写真のように、老朽化が進み寄りかかるとグラつきがあり非常に危険な状態であった。これは、旭川市が降雪地域であり、そのことを考慮しての施工であったにも関わらずこのような状況になったことも含めて生徒への生きた教材となった。

補修作業としては、土台のひびや割れにはセメントを流し込みしっかり固定し、柵の割れや欠損部分は溶接し、ケレン作業、錆止め・塗装作業を行い綺麗で安全な柵が完成した。



次に地域貢献として、市内の幼稚園にあるジャングルジムの塗装が、手つかずの状態であることが分かり塗装作業を行った。当初の予定

では2色の予定だったが、園児たちとの会話の中で「虹色がいいなー！」という声を聞き、急遽色を増やしてカラフルに仕上げた。園児達も大喜びしてくれた。



塗装終了後のジャングルジム

このような体験から、「ありがとう」の言葉をいただくたびに、生徒たちは自分の成長を実感した。そしてコミュニケーション能力など社会に出てから大切な事をたくさん学び、更には使える技術も身につけた。

8. 工業課程の抱える問題点

はじめにでも述べたが、本校工業課程への進学者減は年々進行している。北海道第2の都市である旭川も、強固な産業基盤に支えられている都市ではないので、優秀な人材の流出に頭を悩ませており、特に町工場における次世代の担い手不足は深刻である。本校への求人も増加の一途であるが、本校生徒の旭川市内就職希望者は減少傾向である。北海道立旭川工業高校も令和10年には間口減の対象となっており、工業課程への進学者増を望む地域経済と現状は大きく乖離している。

6でも述べたが、教育目的がはっきりしている工業課程は、工業に興味を持つ中学生には選択しやすい反面、興味の無い中学生にとっては、工業課程の魅力を伝えるための説明を聞いて貰えない。又、旭川市内の工業系の業種に就

職した高卒者の待遇も恵まれているとは言えず、高卒で就職するメリットを感じていない中学生や保護者にも、工業課程の魅力を伝えきれしていない。

9. おわりに

旭川市において、「旭川実業高等学校」の生徒というだけで、他高の男子生徒を震え上がらせた時代があった。そのような「やんちゃ」な生徒を社会で役立つ人材へと鍛え上げる教育は、一定の理解を得ていた時代があった。しかし、時代は変わり、今工業課程に進学する生徒の大半が「ゲーム」を愛し、争いを好まず、役割を着実に遂行する好青年ばかりである。言い方を変えると、「指示待ち」が多い。

大企業や先輩の言うことを聞き、目の前の仕事に熟していけば、勤続年数に比例して給料が増えていく時代は「指示待ち」でも生きていたが、未来においてそのような思考では生活が成り立たなくなってきている。

工業科教育に携わる者として、技術を身につける教育と、創造性豊かな感性を持つ、未来の職人を育成しなければならないと痛感している。しかし、現時点では八方塞がりな明確な展望が拓けていない。

今できることは、工業課程の衰退は社会の衰退であるという認識を、工業課程に関わる全ての教職員で共有し、正しい情報を発信していくことだと考えている。又、在学している生徒の結びつきを強め、尊敬される先輩、先輩を尊敬できる後輩の育成に努め、安心できる学校環境の構築を推進していく。